

P-129

対応に困難を感じた終末期膀胱がん患者・家族への支援と今後の課題

諏訪赤十字病院 泌尿器科

○山崎 智恵¹、三浦 麻衣²

【はじめに】がん患者が抱える苦痛に対し、全人的な視点でのケアが重要である。今回経験した事例は、身体的苦痛に加え関係性の苦悩を表出し、看護師・家族への依存が強く、スタッフ・家族は対応に苦慮していた。A氏の死後デスカンファレンスを行い、A氏に対する思いやスタッフが感じていた苦悩やジレンマについて、また、今後のケアに生かせるように課題を検討したので報告する。

【症例】A氏 70歳代男性。膀胱がんのため膀胱全摘+回腸導管OPEを受けた。病状進行に伴い、骨メタ、大腸浸潤あり。疼痛に対しオピオイド、NSAIDs、リリカと放射線療法を併用。消化管閉塞に対してはイレウス管で減圧行うが、食への希望が強く人工肛門造設する。持続する腹痛と嘔気、せん妄等症状マネジメント不良で身体的苦痛の訴えが続いていた。そのためナースコール頻回、家族へも昼夜問わず電話し、寂しさや苦痛を訴えていたため、看護師・家族から対応に疲弊していると発言あり。対応方法については緩和ケアチームより助言を得ていた。A氏の死後、デスカンファレンスを行いケアを振り返った。誰もが時間をかけてゆっくりと関わる必要があると感じていたが、思うように対応ができず不全感を残していた。しかし、今回の学びを通してケアに生かしたいという前向きな意見が聞かれた。

【倫理的配慮】症例発表に当たり事前に家人より承諾を得ている。

【結論】終末期の患者は、身体の衰弱や苦痛の増強によりADLが低下していくなかで多くの喪失体験をしている。患者の置かれている状況を察し、最期までその人らしくあるために何を大切にして関わるか、また、残される家族へのグリーフケアも大切である。スタッフもまたグリーフケアの対象であり、苦悩や、無力感に対してチーム内でお互いの思いを語り合う場を設けていく必要がある。

P-131

エタネルセプト投与中の関節リウマチ患者に発症した紫斑病性腎炎の1例

高知赤十字病院 内科¹、だいいちりハビリテーション病院²、高知赤十字病院 病理診断部³

○辻 和也¹、有井 薫¹、木俣 敬仁²、天野 絵梨¹、黒田 直人³、吉本 幸生¹

症例は67歳女性。H17年関節リウマチ(RA)と診断。レミケードで投与時反応を認め中止となり、4年前よりエタネルセプトを投与開始。H24年3月上旬、エタネルセプト最終投与7日後より両下肢の紫斑と蛋白尿が出現、血清Cr0.67mg/dlから1.0mg/dlと腎機能悪化を認め3月中旬当科紹介入院。入院時、顕微鏡的血尿と蛋白尿5g/日を認めた。下肢紫斑からの皮膚生検ではIgA、IgM、C3沈着を伴った白血球破砕性血管炎を認め、経皮的腎生検で(光顕)メサンギウム増殖性糸球体腎炎、(IF)メサンギウム領域にIgA、IgM、C3沈着を認めたことからヘノホ・シェーンライン紫斑病性腎炎と診断。入院後、紫斑の再発もありブレドニゾロン30mg/日にて治療を開始、一時蛋白尿は減少傾向にあったが、薬疹を契機に再びネフローゼ状態となりメチルブレドニゾロンのミニパルスも施行した。またRAに併発していたことからタクロリムス3mg/日も開始。今回、エタネルセプト投与中のRA患者に発症した紫斑病性腎炎の症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

P-130

当院検診超音波で発見された後腹膜腫瘍の一例

高山赤十字病院 放射線科

○大久保鮎美¹、今井 丈晴²、山下 光弘³、山口 忠夫⁴

【はじめに】後腹膜腫瘍は頻度が少なく、その種類は多彩である。今回検診超音波検査で偶然発見された一例を経験したので報告する。

【症例】

62歳 男性
当院検診センター腹部超音波検査(以下:検診US)にて、右腎上方に83×60mmの内部不均一で一部に石灰化を伴う腫瘤を認め、右副腎腫瘍または後腹膜腫瘍が疑われ要精査となった。症例男性は、毎年検診USを受けていたが今回が初めての指摘であった。自覚症状はなく、血液データも正常範囲内であった。

【画像所見】

CT:右腎上極に82×69mmの腫瘤を認め、副腎は圧排されていたが正常であった。大部分は低吸収で、一部に脂肪濃度を含んでいるように見えた。単純CT上、腎血管筋脂肪腫が疑われたが造影CTでは皮膜・隔壁等ははっきりせず内部にわずかな遷延性の造影効果を認め、腎血管筋脂肪腫は否定的だった。以上より、右腎腫瘍または後腹膜腫瘍が考えられた。MRI:右腎上極に広く接するように嚢胞状腫瘤を認め、腎の変形はわずかでT1WIにて低信号、T2WIにて高信号で隔壁ははっきりしなかった。拡散強調画像では高信号となったが、ADC画像でも高信号となり悪性とは言い難くリンパ管腫が疑われた。

PET:腫瘤にはFDGでの有意な集積認められず、腎血管筋脂肪腫として矛盾しない像だった。

画像上確定診断には至らず、急な増大が疑われ悪性も否定できなかったため手術となり病理診断では、粘液型脂肪肉腫と診断された。

【まとめ】

後腹膜腔にできる腫瘤は巨大になるまで無症状で、発見された時点ではかなり進行している場合が多い。今回、画像で確定診断に至らず苦慮した症例であったが本症例は自覚症状がなく検診USで偶然発見され、転移を認めず早期治療につながったため検診USが有用であった。

P-132

世界腎臓デー in さいたま中央

さいたま赤十字病院 腎臓内科¹、栄養課²、看護部³、薬剤部⁴、リハビリテーション部⁵

○雨宮 守正¹、佐藤 順一¹、井原佐知子²、福田加奈美²、唐川奈緒子³、狐塚友里子³、亀井 陽子⁴、齋藤 彩子⁴、小堀 夏紀⁴、山本 朋子⁵、西井 秋子⁵、佐藤 奈緒⁵

【はじめに】世界腎臓デーは腎臓病の早期発見と治療の重要性を啓発する取り組みとして、毎年3月の第2木曜日に定められ、全国各地でイベントが行われている。さいたま市でも、はじめて慢性腎臓病啓発イベントを行ったので、その様子をここに報告する。

【目的】慢性腎臓病の認知度向上と、早期発見・予防の重要性の啓発。

【方法】イオンモール与野のホールを使用し、さいたま市与野医師会、包括支援センターと共催し、さいたま市に後援していただいた。また消防の春の火災予防運動と共同企画とした。

【活動の詳細】医師による、慢性腎臓病の説明。包括支援センターによる、血管年齢測定と福祉事業の説明。作業療養師による、In Body測定とワンポイントストレッチ教室指導。管理栄養師による、ワンポイント食事アドバイスと減塩みそ汁の試食。看護師による、血圧測定とむくみのセルフチェック指導。薬剤師による、服薬指導。消防士による、救急車の適正利用、救急法の説明。

【結果】1000人近い人が立ち寄った。モールを利用する比較的若年者も、腎臓病や生活習慣病に興味を示し盛況であった。

【結論】健康年齢延長・医療費削減などのためには日頃の診療にとどまらず、早期発見・予防は重要であり、今後も継続が必要であると考えられた。今後は生活習慣病予防の一環として活動を継続していきたい。